



本学園創始者
 カルビット・クラーク博士
 (1887-1970)



クリスマスツリー点火祭(和泉クラーク・ホール前)

2012年度聖句

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。
 どんなことにも感謝しなさい。

(テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 第5章16～18節)



いずみちゃん クラークくん

(クラーク学園和泉短期大学のマスコットキャラクター)

izumi ニュース Vol.15

和泉短期大学 広報渉外ユニット

発行責任者 理事長 深町 正信

〒252-5222 神奈川県相模原市中央区青葉2-2-1

TEL.042-754-1133 (代表)

URL.http://www.izumi-c.ac.jp

和泉の実習について

実習・ボランティアセンター長 櫻井 奈津子 4

izumi TOPIC

- 保育内容「環境」の授業でさつまいも掘り 2
- シンガポールの保育・福祉を学ぶ 3
- 第47回全国私立短期大学体育大会結果報告 3
- 高校教員の社会体験研修 5
- 本学の実力がマスコミにも登場! 6

保育内容「環境」でさつまいも掘り

非常勤講師 鈴木貢次郎

さつまいも掘りを、保育内容「環境」で実施しました。このさつまいも(紅あずま)は、前期開講の同演習で苗を植え、夏季の間、受講生が定期的に灌水や除草を行って育てたものです。収穫は、後期受講生が、片付けを兼ねて行いました。この演習を通し、「土や微生物、植物にふれること、道具(刃物)を扱うこと、常に畑やその周囲をきれいにし、近所にも気を遣うこと、そして食に感謝すること等」を学習しました。また収穫したさつまいもは、食堂で「大学イモ」としてふるまって頂いたり、「子どもの食と栄養」の実習では学生グループごとにアイデアを生かして、「子供と一緒に作れることをコンセプト」としてスイーツを作ったり、日頃、陰で支えている関係者の方々に感謝の意を表すなど、最近の社会問題を払拭する「連携」の大切さも学ぶことができました。



▲鈴木貢次郎先生



▲農園



▲収穫後の様子



▲おいしい大学芋になりました

さつまいも掘りを体験して

1年 播磨 彩夏
(栃木県立桐生女子高校出身)

私は、さつまいも掘り体験をして、講義では得られない様々な体験をすることができました。普段、触れることが少ない土や植物、虫などと触れ合うことによって、保育士に必要な知識を身につけることができました。将来、保育者の立場になった時には、さつまいも掘り体験で得た知識を生かして子どもたちに「食の大切さ」を伝えていきたいと思っています。



シンガポールの保育・福祉を学ぶ

教授 鈴木敏彦

本年度の「インターナショナル・フィールドワーク」は、8月28日～9月1日の4泊5日の日程で、シンガポールを訪問いたしました(参加学生18名。1年生3名、2年生15名)。

本年度の研修の主題は、「多文化・多民族国家の保育・福祉を学ぶ」といたしました。ご存じのとおり、シンガポールは東南アジア諸国の中でも豊かな経済力を誇る国ですが、その原動力の一つには、多文化・多民族の融和・協調が挙げられます。こうした国のあり方は、保育・福祉分野にも及んでおり、見学においても、多言語による保育・福祉、それぞれの価値・文化を尊重する保育・福祉等の姿を見ることができました。

短い期間の訪問でしたが、幼稚園・保育所3か所、福祉施設1か所の見学及び実習を行いました。学生は、あらかじめパネルシアター、折り紙、歌などのプログラムを日本で準備し実習に臨み、言葉の壁を超えた交流を楽しんでいました。学生の皆さんには、今回の体験を活かし、他者との違いを受けとめ尊重することのできる保育者・支援者を目指して欲しいと思います。



参加学生の声

2年 田中 美穂(神奈川県立横浜国立大学出身)

8月に、インターナショナル・フィールドワークの授業で「シンガポール」に海外実習に行きました。初めて海外の保育・福祉制度を学び、保育園などの施設見学を通して「子どもたちの最善の利益」について考えることができました。多国籍な国だからこそ、人種や宗教などで差別をせず、相手を尊重する人々の考え方にとても関心をもちました。

なかなか言葉が通じないこともありましたが、子どもたちと一緒に遊んだり、お年寄りの方と会話を楽しんだりするなかで、「一緒にいる」という気持ちが通じていることを実感しました。多くの人たちとのふれあひを通して、心のつながりは目には見えないけれど、とても大切であることに気づかされました。人と人がつながっていくことで「福祉」という輪が広がっていくことを、今回の海外実習を経験し感じることができました。

海外研修を通じ、一言では表せないほどのたくさんの学びが深められました。今後は、今回の体験を活かし、近い将来、海外ボランティアなどにも積極的に参加していきたいです。

学生の海外ボランティア活動

インド

2年 内田 光歩(茨城県立日立北高校出身)

私は今年の夏の2週間、インドへバックパッカーの旅をしてきました。その大きな目的の一つに、ボランティアがあり、二つの施設でボランティアをさせて頂きました。

マザーハウスというマザーテレサの設立した施設は、孤児の家や障がいのある人の家、死を待つ人の家等、6つの施設に分かれています。わたしは、女性精薄者の家に行き、洗濯をしたり、歌を歌ったり、生活のお手伝いをしたりしてきました。インドの殺伐とした社会の中で、その場だけは、マザーテレサの残した温かさが残っているようでした。

マザーベイビースクールという日本人の高橋歩さんが設立した、インドの子どもが無償で通うことのできる学校は、小学校就学前の年齢から中学生までの子どもが、教育を受けるために通っています。日本人スタッフとインド人スタッフの子どもたちと関わりの温かさに感動し、子どもがのびのびと過ごせる環境に心打たれました。

この二つの施設には、毎日たくさんの人がボランティアに訪れています。ボランティアを通して、自分には何が出来るのか考えるきっかけになりました。また、日本の教育機関で働く前に、このような環境や現状を見ることができ、とても刺激になりました。



カンボジア

2年 山崎 朱実(神奈川県立麻溝台高校出身)

大学一年次の3月に1週間、カンボジアへ行きました。NGOのボランティアツアーで、カンボジアの子どもたちが将来ガイドなどの職業に就けるよう、日本語と英語を教えるボランティアに参加しました。具体的には、現地の小学校へ行き、先生として1クラスの子どもたちに1日6時間程、英語と日本語を教えました。現地ではホームステイをし、費用は全て合わせて15万円程度でした。

最初は、「貧しい国の子どもたちに何か出来ることはないか」という思いで行きました。確かにカンボジアは物質的には貧しく、学校に行く事が出来ない子どもや、靴を履いていない子どもがたくさんいました。しかし、村の人全てが家族のように温かく子どもたちを見守っていて、カンボジアの子どもたちは心が豊かで、とても幸せそうに笑っていました。

この経験を通して、子どもの欲求を玩具やゲーム機などの物で満たすのではなく、きちんと愛情を注ぐ事の大切さを知る事が出来ました。



第7回 おもちゃインストラクター養成講座が開催されました

7月31日(火)～8月1日(水)の2日間、第7回おもちゃインストラクター養成講座が開催されました。日本グッド・トイ委員会から派遣して頂いた、おもちゃコンサルタントマスターの稲葉恭子先生にご指導頂き、受講した学生70名に「おもちゃインストラクター認定証」が授与されました。次回は来年3月に開催予定です。



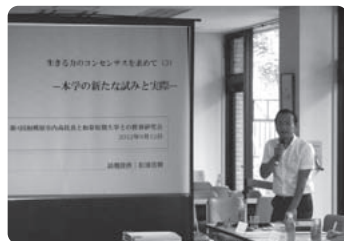
▲既製品では味わえない手作りおもちゃならではの良さを体感し、保育の現場で役立つたくさんのおもちゃ作りを楽しく学びました

第4回(2012年度)市内高等学校との教育研究会を開催しました

2012年9月12日(水)、相模原市内13校の高等学校から校長先生、副校長先生など先生方にご参加を頂き、第4回教育研究会を開催いたしました。

松浦浩樹准教授より「生きる力のコンセンサスを求めて(3)-本学の新たな試みと実際-」の話題提供がされ、その後に意見交換が行われました。

各高等学校の先生方から頂きましたご意見などを参考として、地域に根ざした短期大学として、今後とも市内高等学校との連携強化に力を注いでいく所存です。



第47回全国私立短期大学体育大会結果報告

第47回全国私立短期大学体育大会は去る8月6日(月)～9日(木)に開催され、本学からは女子卓球(初出場)、女子硬式テニス(初出場)、男子バドミントン(初出場)、女子バレーボール(2回目)、女子バスケットボール(4回目)、男子バスケットボール(3回目)の各競技に出場しました。

8月6日(月)に行われた開会式では、昨年、女子バスケットボールBブロックを制した際の優勝杯を、バスケットボールサークル部長の風間千秋さん(児童福祉学科2年)より返返し、交換に記念の盾を頂きました。



バドミントンの男子シングルスに坂部俊太君(児童福祉学科1年)が出場した。坂部俊太君(児童福祉学科1年)は激戦を勝ち抜き、本学男子では初めて、見事に男子シングルスで3位(出場選手21名)となりました。



高校教員の社会体験研修

3日間を終えて 2012年8月2日(木)～4日(土)

神奈川県立相模田名高等学校 教諭 松川 美知子先生



和泉短期大学での社会体験研修を通して得たものは今後の教員生活に大きな役割を果たしてくれるだろうと感じています。

1日目、広報関連業務を体験させていただきました。オープンキャンパス参加者配布資料は、参加者にとって知りたい情報がコンパクトに見やすくまとまっていました。おそらく、この資料が出来上がるまでは担当者の弛まぬ努力があったのだらうと思えました。また、この日に印象的だったことは職員と学生の距離の近さでした。会うと元気に挨拶を交わすだけではなく、自分たちの近況報告までをしていくという学生が多く、職員との信頼関係・絆の深さに感銘を受けました。日頃から職員の皆さんが愛情を持って学生に接しているのでしょう。

2日目、図書関連業務を体験させていただきました。図書館の第一印象は、和泉短期大学で学ぶ学生が必要な情報がすぐに手に届きそうな配置だなどというものでした。今回体験させていただいた原簿処理という業務は、そ

のような使いやすい図書館は見える仕事だけでは成立しないということも教えてくれました。正確に情報を提供するために、元のデータを綿密にチェックする重要性を学びました。

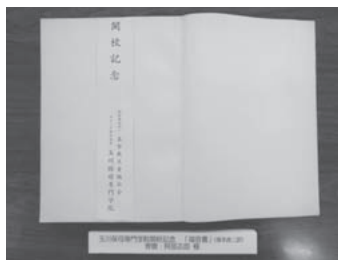
3日目、広報関連業務としてオープンキャンパスに参加させていただきました。学生が主体になり案内や説明をしている姿は、短大で学生が大きく成長するのだという事実を見せてくれました。受け身ではない自ら考え行動する力が培われているのは、1日目に見たような日常の職員との関わりや保育者になるという自らの夢に向かう力を生かす場が与えられているからなのでしょう。来場した高校生・保護者に対応していた学生は誰もが、和泉短期大学の学生として誇りを持っているようでした。また、高校の教員としてオープンキャンパスに参加する大切さを実感できたことは大変大きな収穫でした。職員や学生による様々な工夫が見られ、大学の様子が分かるオープンキャンパスに参加することは進路に悩む高校生にとって良い機会であると思います。

このような貴重な経験をさせていただき感謝しています。今後の教員生活に役立てて参りたいと考えております。

玉川保育専門学院 開校記念「福音書」を寄贈して頂きました

阿部志郎先生(開校時は、「社会福祉事業一般」の授業を担当)より、本学園設立の母体であるクラーク博士記念玉川保育専門学院開校式(1960年5月28日 22名が1期生として入学)において、CCFのクラーク博士はじめ、厚生省(当時)、東京都民生局、全国社会福祉協議会、日本キリスト教協議会等内外の来賓、施設長など約160名の方々に差し上げた貴重な開校記念品(福音書)を寄贈していただきました。

本学1号館玄関エントランスホールに展示させていただきます。



学生食堂 大石 文代前店長へ「退職に際してのインタビュー」

Q1 1997年(平成9年)4月から15年5ヶ月間、和泉短期大学食堂に店長としてお勤めいただきました。この間の一番の思い出は何ですか?

A1 一番の思い出は学生の皆さんが、「おいしかった」「ごちそうさま」と声をかけてくれたことです。とても励みになりました。

Q2 大石さんの料理のレパートリーの多さにはいつも感心させられました。そして、どれもが華やかでおいしいものでした。こうしたメニューを考えるうえで一番気にかけていたことはどのようなことでしたか?

A2 学生の皆さんの体調を気遣って、野菜を多く取り入れ、栄養が偏らないメニューを考えました。また、温かい料理は温かいうちに、冷たい料理は冷たいうちに食べられるよう工夫しました。

Q3 大石さんの渾身の一品をあげるとしたら、どのような料理でしょうか。

A3 すべての料理に心を込めましたので、一品だけは難しいです。

Q4 最後に、和泉の学生に対してメッセージをいただけますでしょうか。

A4 保育者になっても、ぜひ子どもたちと食事の際には、一緒に「おいしいね」と言ってください。感謝の気持ちが大切です。皆さん、ありがとうございました。

15年以上にわたって、在学生・卒業生・教職員を見守り続けて下さった大石文代さん。退職されたのは非常に残念です。多くの関係者を代表してお伝えいたします。「長い間、お疲れ様でした。本当にありがとうございました。」



職員から贈った色紙

財団法人一羔会(長野県小諸市)の本学訪問について

2012年9月4日(火)浅間山麓で知的障がい者の自立支援施設 社会福祉法人小諸学舎を活動母体とする財団法人一羔会(いちこうかい)の関係者14名の皆様が視察研修に訪れました。当日は、小諸を早朝に経ち大型バスで4時間かかったそうです。午前中本学の関連団体である東京・町田市の児童養護施設「バット博士記念ホーム」を見学し、移動後、学生食堂で食事をされました。午後は、和泉短期大学("キリスト教に基づく心の教育"、"児童福祉学科")の象徴といえる和泉クラーク・ホール、チャペルステンドグラス、キャリアデザインセンター、実習・ボランティアセンター、図書館など各施設を熱心にご覧になり、小諸までお帰りになりました。

本学では3時間あまりの視察研修でしたが、晴れ渡る浅間山のように、すがすがしい皆様の笑顔が印象的でした。お越しくださしまして、ありがとうございました。



本学の实習について

実習・ボランティアセンター長 教授 櫻井奈津子



保育士資格、幼稚園教諭免許の取得には実習が必要です。保育士資格のための保育実習は、「保育実習Ⅰ(保育所)」「保育実習Ⅱ(児童福祉施設)」の2回の実習を終了した後、3度目の実習として「保育実習Ⅲ(保育所)または「保育実習Ⅳ(児童福祉施設)」のどちらかを選択して行います。この3回の実習はそれぞれ12日間以上90時間以上の実務を行うものです。幼稚園教諭免許のための教育実習は15日間以上120時間行います。従って、卒業までに保育士、幼稚園教諭免許の両方取得するためには、1年次2月から2年次9月までの約8ヶ月間で4回の実習を行うこととなります。実習は、実習期間だけを無事に過ごせばよいものではなく、実習実施に伴う事前学習(保育実習指導Ⅰ・保育実習指導Ⅱ・教育実習指導)はもちろんのこと、それまでに履修し習得した知識・技術を統合させ現場経験を積むものです。手取り足取りや

り方を教わるのではなく、学生自らが実習に対する自己課題・実習テーマを設定し、主体的に必要な準備を進めて行うものですが、自分で決める、自分から動く、考えて実行するといった作業に不慣れな学生が目立つようになりました。本学では、グループアドバイザーが実習指導科目を担当し、履修する全ての実習に対して、学生が主体的・意欲的に必要な準備を行うこと、実習体験を振り返り次の課題に向けて取り組んでいくことを支援しています。これは、実習指導をハウ・ツールの教授ではなく、実習を通して成長する学生への支援ととらえているからです。実習の事前学習は入学と同時に始まります。1年次前期は実習への心構えや実習全般に対する諸注意、夏休みを利用したボランティア活動の推奨など、保育者を志す新入生にとってはウォーミングアップ的な内容で、初めての实習先となる保育所の職員を講師にお招きして、保育所の日常を紹介していただき、あわせて実習生に望むことを講義していただいています。後期に入ると、マナー講座、幼稚園・福祉施設の職員による特別講義、2年生の実習体験発表等を通して、実習への具体的なイメージを次第に明確にしながら、保育実習Ⅰ(保育

所)への準備を始めていきます。2年次5月と6・7月の実習は、半数ずつ保育実習Ⅰ(児童福祉施設)と教育実習Ⅰに分かれて行われ、5月保育実習Ⅰ(児童福祉施設)、6・7月教育実習Ⅰ(児童福祉施設)の学生と、5月教育実習Ⅱ、6・7月保育実習Ⅱ(児童福祉施設)の学生とに分かれます。夏休みをはさみ、9月の保育実習Ⅱ(保育所)または児童福祉施設が終了するまで、学生にとってははもともと厳しい半年間となります。時としてそこかしこから悲鳴のような学生の声も聞こえてきますが、実習を体験する毎にたくましくなっています。増していることも事実です。初めての实習が思うようにできず、実習先でも厳しい叱責を受けて落ち込み、不安を感じながら、再び同じ実習先で保育実習Ⅱを経験する学生もいますが、自分でも気づかぬうちに実習への心構えや具体的な準備、実習中の動き方などが身についてきたのでしょうか、「あれほど嫌だった実習が2度目には楽しく感じられました」との感想もよく聞かれます。

今日も実習を前に、1年生がドキドキしながら資料の閲覧をしています。1年後の成長を期待し、時には厳しく、時には受容的に学生の声に応える私たちです。

実習を体験して

二年 阿部 波瑠那(神奈川県立旭高校出身)



私は杜の郷(横浜市)という小舎制の児童養護施設で実習させて頂きました。私が実習で一番大切だと思ったことは子どもたちに対して当たり前前に接するということです。子どもたちの成育歴を知り、それを知った上で子どもと接することはとても大切なことですが、成育歴を知ったことで「かわいそう」という憐れみや「してあげる」的な考えからではなく、一人の人間として当たり前にかわかることの大切さや難しさを学ぶことができました。また、どんなに職員と子どもとの間に信頼関係があり、24時間ずっと一緒にいたとしても、子どもたちにとっては親と会う10分の方が大きく、より強く子どもの気持ちの中に残るということを感じました。小舎制・グループホームという家庭に近い環境、家族のように暮らしている施設でも、子どもにとっては実の家族の存在が大きいということを知りました。

二年 熊谷 彩葉(都立日野高校出身)



私はせいがの森保育園(八王子市)で実習をさせて頂きました。ここでは異年齢保育を行っており、私は3〜5歳のクラスに入りました。特に責任実習の際に全員が楽しめる活動と計画したのですが、年齢の違う子どもが一緒にやるゲームを考えることが難しく、人数が多かったため、うまくまとめられるかどうか、最初は不安ばかりでした。私は主活動で「しっぽとりゲーム」を行ったのですが、子どもたちは初めて経験したようでした。思うように進まないこともたくさんあったのですが、終わった後「またやりたい」と言ってくれてとても嬉しかったです。保育園での責任実習は良い経験になりました。

2012年度『教育環境充実資金』募金 -是非ともみなさまのご協力をお願い致します-

2012年4月1日より、「教育環境充実資金」として募金活動を行っています。

2013年度206教室を改修して、ML特別教室の設置が理事会、評議員会で承認されました。多くの皆様に賛同いただいておりますが、一層のご理解をいただきたくお願い申し上げます。

- ご寄付者数 90件93名(団体含む)(2012年4月1日～2012年11月30日)
- 寄付金額 2,743,000円(2012年11月30日現在)
- 募金対象事業 音楽電子教育システム(EML)の導入
震災・災害対策他
- 募金目標額 10,000,000円
- 期間 2012年4月～2013年3月
- 寄付金 1口5,000円

ご寄付いただきました方につきまして、感謝をもってご報告いたします。

なお、当局が受理いたしました日付けで処理いたしておりますので、多少のずれが生じている方もあるかと存じますが何卒ご了承をお願いいたします。

法人事務局



▲音楽電子教育システム(EML)

寄付者一覧(2012年8月1日～2012年11月30日)(67件70名)

足立 元広・明子	亀井 朝日	曾根 真理子	深町 正信
安藤 直代	川島 立志	田口 喜久江	古川 佳子
井狩 芳子	河角 幸恵	武石 宣子	増井 由美子
池松 順子	川瀬 沙樹	武田 美智子	松井 敏枝
井上 容子	川瀬 富枝	武田 陽子	宮崎 雄一郎
今泉 治子	岸川 洋治	玉木 光一	村田 詔子
上田 弓子	久保田 文江	土屋 敦	村山 徳淳
内田 千恵子	小井土 智江子	戸田 美穂	森田 泰弘
卜部 祐子	國府田 智子	土橋 正文	山内 恵子
太田 耕造	雑賀 えり子	富田 貞夫・真衣	山下 幸子
大塚 恵子	佐久間 志保子	富田 順子・さき	山中 仁
荻原 英子	佐藤 町子	中野 みどり	山本 美貴子
小倉 敏子	佐藤 蘭美	中畑 宏幸	吉田 耕也
小原 美保子	佐藤 美紀	中道 由紀子	
加瀬谷 明敬	佐藤 守男	中村 順子	
片桐 寿子	佐原 憲俊	新田 恭平	
片山 知子	鈴木 香	平田 美智子	
勝野 マリ	鈴木 智鶴	平野 猛	

1号館空調設備機器取替更新工事を実施しました

本学1号館は、夏は冷房専用空調機(1986年、1989年、1992年、1997年設置)、冬はボイラー式暖房(1976年設置)としていました。

2012年夏期休暇期間中に灯油焼きボイラーを廃止し、冷暖房の空調設備機器取替更新を行いました。地球温暖化に対するCO2削減、省エネ対策として、コスト、環境両面に配慮したものです。今回の空調機は、1号館事務局で設定温度や運転の切りの替え操作が出来る集中管理方式です。

学生からは「授業に集中できるようになった」「教室が暖かくなった」と好評です。



本学の実力がマスコミにも登場!

週刊「東洋経済」本当に強い大学2012に掲載されました

週刊東洋経済(2012年10月27日号 特大号)「本当に強い大学2012」において、本学が「就職に役立つ資格に強い大学(介護・福祉系資格に強い大学・学部)」保育士資格取得者数第9位にランクされました。

また、「私立大財務力ランキング」において財政余裕度トップ30で第30位にランクインしました。

詳細は、週刊東洋経済2012年10月27日号「本当に強い大学」をご覧ください。

神奈川新聞朝刊教育欄

「未来航路」に掲載されました

2012年9月24日(月)、神奈川新聞朝刊教育欄「未来航路」に和泉短期大学の記事として、伊藤忠彦学長のインタビューが掲載されました。

ぜひご覧ください。

教員の活動(教授 鈴木 敏彦)

●NHK(長崎放送局)

障害者虐待防止法の10月からの施行を控えた2012年9月3日(月)、長崎県障害者虐待防止研修(福祉施設職員など300人が参加)が開催され、本学の鈴木敏彦教授が講師を務めました。この様子は、同日のNHK(長崎放送局)ニュースにて紹介されました。

鈴木教授は、障害者虐待は家庭・施設・職場等どこでも起こりうること、障害者自身が虐待を受けていると認識できず被害を訴えられないケースがあること等を過去の事例を交えて説明し、虐待の未然防止と早期発見がとくに重要であることを強調しました。

●東京新聞

2012年9月5日(水)、世田谷区主催の「障害者虐待防止フォーラム」が開催され、本学の鈴木敏彦教授がパネリストとして参加いたしました。

同フォーラムの様子は、東京新聞にて報道されました。

【記事抜粋(2012年9月6日、東京新聞朝刊)】

障害者やその家族を地域で見守り支えるにはどうしたらいいのか。世田谷区障害施策推進課は5日、障害者虐待防止フォーラムを区内の北沢タウンホールで開いた。

障害者虐待防止法は昨年6月、議員立法で成立。来月1日に施行される。児童虐待、高齢者虐待、DV防止の各法に続き、障害者の権利擁護にも光が差す。発見者による通報のほか、障害者虐待防止センター設置の義務を市区町村に課す。

和泉短期大の鈴木敏彦教授(社会福祉学)はフォーラムで「障害者自身が虐待を認識し、声を上げられる支援を」と、障害者を取り巻く社会の側に変化を求めた。(以下略)